市民のためのハイパースペース

さまざまな思想や趣味をもつさまざまな市民が気軽に集まって
自由闊達に交流できる場
市民の共同のリビング・書斎・カフェ のようなハイパースペース
をつくっていきたい
地域のポテンシャルを高め
生きる喜びを感じられるような施設にしたい

市民の情報インフラ

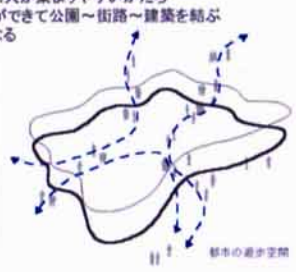
図書館には知識の集積としての資料・情報がそこにあるだけでは
なくそこで思索し知恵を生み出す館（やかた）としての機能を
果たすポテンシャルがある
ここから新しい知的創造物、新しい起業、新しい芸術、新しい交流
が生まれる場をつくりたい
そのためには以下の強化をはかりたい
① アーカイブ機能（デジタルアーカイブの中心施設としての充実）
ハイパーライブラリー
②ナレッジナビゲーション機能（知識・情報の水先案内）
③独自のイベント活動

ビルディングではなくプレイスを

すべての市民に開かれ交流の場となるためには
建築そのものが変わらなければならない
これまでのようなビルディング型ではなく広場のような
公園のような新しい建築型 が必要である
タテモノbuildingではなく状態conditionをつくること
そのためには**低層**であること
基本的に地上は平屋 ボリュームがないことによって
建築と公園との一体化が生まれる
（何階にもわたるビルディングはいくら開放的にしても建物と公園とが
分離してしまうので公園との親和性は生まれにくい）

open interface やわらかな境界

建物の外壁を近似曲面によるやわらかな境界とすることによって
内部外部の自然な交流をうながす
やわらかに波打つ境界面はガラス壁と木パネルや建具の連なり
からなり四周を開放することができる
四方八方から自然に人が集まりやすいかたち
どこからでも出入りができて公園～街路～建築を結ぶ
都市の遊歩空間となる

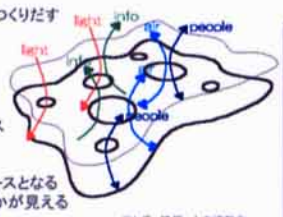


multi-void流動するヴォリューム

光と風、情報、人の流動化
階層を流動化する多孔スラブ multi voidをデザインする
（パンチング＝スラブとでもいうべき状態）
大きな吹き抜けではなく多くの孔をうがつことによって
上下階があいまい化し
ちぎれ雲に見え隠れする吹抜屋台法の絵巻物のように
空間を流動化させる

群島システム＝浮遊するスペース・ユニット

スペース・ミックス x メディア・ミックス
常にオン・プロセスな建築であることをめざす
各施設のレイアウトは固定的なゾーニングによらず
大小さまざまなスペース・ユニットが浮遊するという形式
オン・プロセスな状態を維持することによって
偶然の組み合わせ・隣接性によって思わぬ出会いをつくりだす
スペースでありメディアであるということ



パッシブ・ワンネス・ナチュラル

空間の快適性をつくる3つのコンセプト
① パッシブ（passive）
四周の建具を開け放つことにより半屋外的なスペース
となる
② ワンネス（oneness）
建物全体はひとつながりのワンルームのようなスペースとなる
高い一覧視認性によって市民が互いに何をしているかが見える
空間化されたディスプレイ装置たる建築
③ ナチュラル（natural）
効果的に自然素材を用いて快適なインテリをつくる

伽藍からバザールへ ～市民参加の手法について

建築ができあがるプロセスをオープンソース化する
建築のプログラムを「すべての市民がシェアするソフトウェア開発」
としてとらえオープンエンドでボランタリーな参加をうながす
建築家はそのプログラムをオープンソースとしてコーディネートする
提案されたプログラム＝建築は13万の武蔵野市民の手によって
改良（デバック）が行われながら
ヴァージョンアップを繰り返すというイメージ
これまでのトップダウン的なやり方（伽藍）ではなく
ボトムアップ的な合意形成（バザール）をめざす

市民の多様性を反映した施設をつくりたい
プロセスは可能な限り多くの市民に開かれたものとしたい
これまでの市民参加の施設づくりをさらにより オープンに展開したい

①3つのテーブルを立ちあげる
・市の建設準備委員会と建築家＋アドバイザーによる作業テーブル
・市民同士のミーティング形式による市民テーブルの立ち上げ
※市民の多様性を反映するように複数設ける：市民×市民
・新しい公共施設を考えるための専門家テーブルの立ち上げ
（各専門家、NPO他）
②ワークショップ
施設の新しい使い方を考える発見的ワークショップ
③広報
ウェブ上にヴァーチャル広場を立ち上げて経過を常に公開する
その他複数の媒体・手段によって広告活動を展開する
④ 記録
定期的な自前メディアの発行
プロセスをメイキング本として出版する

3つのアーキテクト

計画は3つのアーキテクトによって遂行する
空間アーキテクト＝プログラムを立ち上げ空間化する
情報アーキテクト＝情報インフラ（デジタルアーカイブ）構築
コミュニティアーキテクト＝ワークショップ

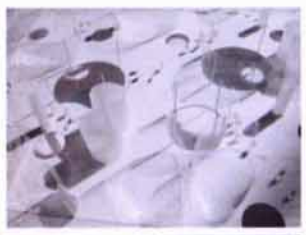
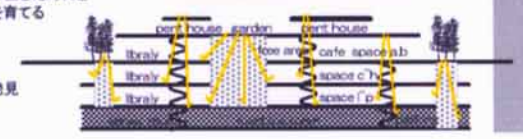
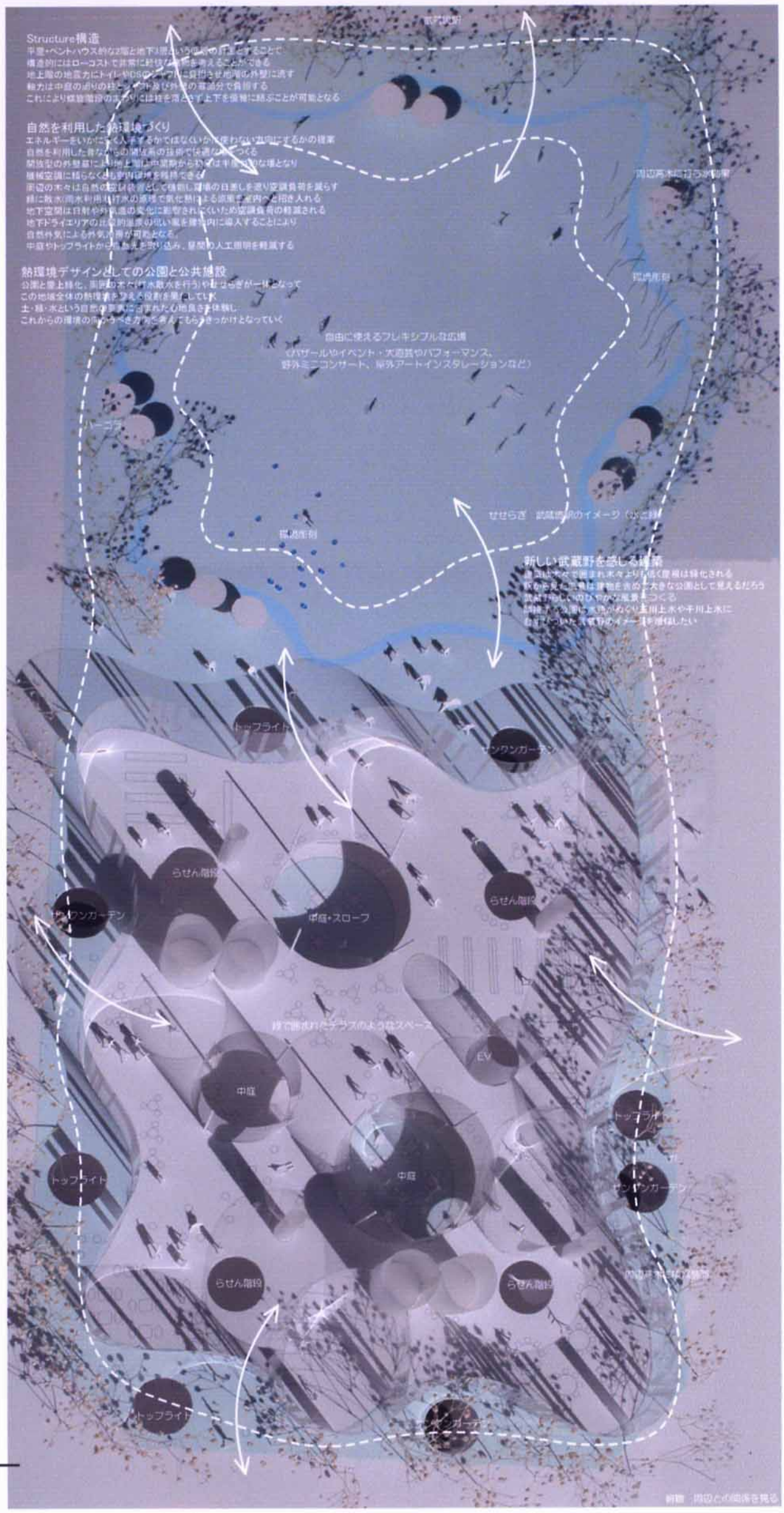
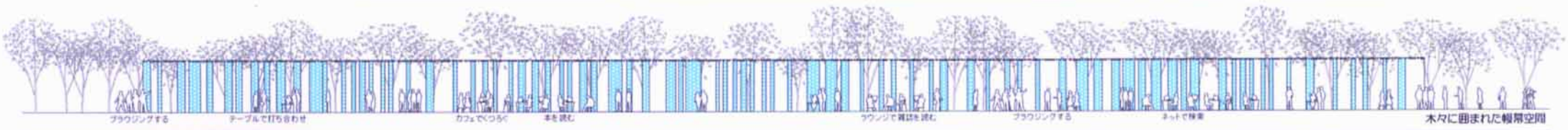
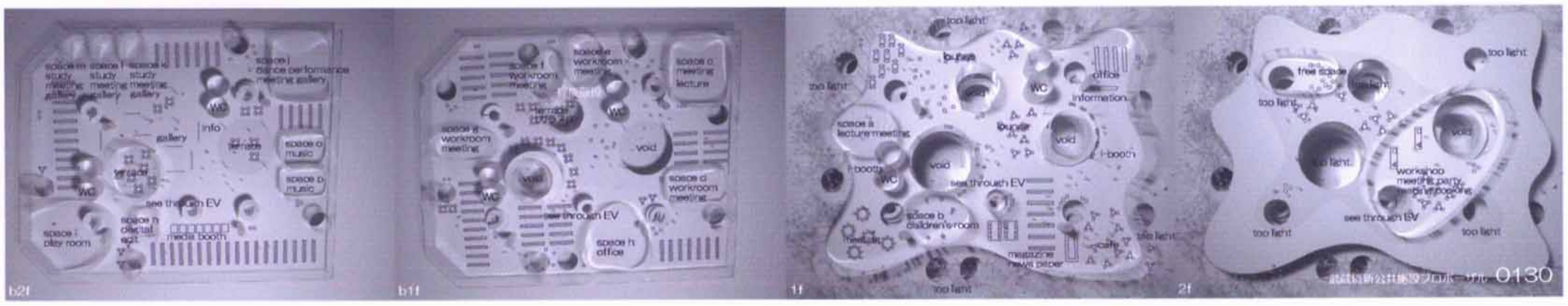
オルタナティブな運営主体の育成

行政サービスの一環としての公共施設から
ユーザーとの共感に基づくNPO経営の公共施設へ
官から一方的に供給されるサービスとしての施設ではなく
ユーザーによるユーザーのための運営をめざす

コミュニティのインキュベーター

知的活動を支援するライブラリー機能と伴に
地域の人々に役立つ地域情報やテーマを集めて提供する等
より開かれたコミュニティをサポートする施設をつくる

例として
・「シニア」「医療」「保育園」などの検索をすると地元の関連施設・団体
関連情報などが一覧できるようなデータベースや書棚の設置等
・就職・起業、健康・医療、住宅・消費者、障害者、親・子供・家族、など
市民に身近なテーマ別の書棚を設けるなど
・地域の活性化につながる多様な講座
知識や技能を一方的に与えるのではなく、その後の広がりがあるもの
例えばシニアのためのパソコンボランティア養成講座など技術を習得し
次にボランティア講師として生きがいを持ちながら新しい生徒に教える等
小学校と連携しこの施設を最大限利用し好きなアーティストの絵を
その人になったつもりで書いてみてその人の生い立ちやその生きた時代を
調べて発表するなど今後この施設を上手に利用していく芽を育てる



横断的な施設利用によるワークショップ
図書館×アートスタジオ×ミーティング×カフェ・・・
情報リテラシー×空間リテラシーによる多様な使われ方の発見